

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16741

研究課題名(和文) 視聴覚コーパスに基づくオノマトペの実証的語用論研究

研究課題名(英文) An empirical pragmatic study of ideophones based on audiovisual corpora

研究代表者

秋田 喜美 (Akita, Kimi)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：20624208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、主に日本語のインタビュー映像を用いてオノマトペ(擬音語・擬態語)の視聴覚的特徴を観察した。質的・量的な分析の結果、話者はオノマトペを使用する際、目立ったイントネーションや独特な声色、ジェスチャー、表情の変化、アイコンタクトといった行動的特徴を見せるがわかった。こうした特徴の多くは、オノマトペが動詞として使われる場合(例：グルグルする)より、副詞として使われる場合(例：グルグルと回る)のほうが頻繁に見られ、言語構造との相関を見せる。オノマトペは言語表現でありながら、多かれ少なかれ音真似やジェスチャーのような特徴も併せ持つ、両面的なコミュニケーションの媒体といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オノマトペは世界中の言語に存在する一方で、そのコミュニケーション上の役割は真剣に研究されてこなかった。日本語は、オノマトペが豊富な言語としては例外的にデータが豊富である。したがって、本研究が示した日本語オノマトペの言語的・非言語的特徴は、世界の言語研究の中で重要な意味を持つ。また、オノマトペは日本語学習者に習得困難とされるが、本成果は、オノマトペの理解におけるジェスチャーや表情といった身体行動の重要性を示唆する。この点は、近年加速を見せるオノマトペの教育・診療・マーケティングなどへの応用においても考慮すべき点である。

研究成果の概要(英文)：This study observed the multimodal properties of ideophones (a.k.a. giongo/gitaigo, mimetics, expressives) in audiovisual data, especially Japanese interviews. Qualitative and quantitative examinations revealed that ideophones are often accompanied by prominent intonation and voice quality, gesture, facial expression, and eye contact. These behavioral features are more frequent in adverbial ideophones (e.g., guruguru-to mawaru 'to rotate whirlingly') than in verbal ideophones (e.g., guruguru-suru 'to whirl'). It is suggested that ideophones are an ambivalent medium of communication that is both linguistic and "prelinguistic" (like gesture and vocal mimicry).

研究分野：言語学、認知言語学、心理言語学

キーワード：オノマトペ 擬音語・擬態語 類像性 音象徴 マルチモーダル コーパス 表情 韻律

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) オノマトペ (擬音語・擬態語) は、しばしば独特な形式的特徴を持つ。例えば、日本語のオノマトペはその約 40%が重複形 (例: ワンワン、クラクラ) であり、約 15%が和語では許されない語頭/p/音を持つ (例: ポカポカ、プルン)。また、「ニコニコと笑う」のように「と」で引用されるほか、場合によっては「すると、少女はニココリ。」のように文末にも現れうる。さらに、オノマトペは形式と意味の関係が直接的であり、この直接的関係は「類像性」や「音象徴」として論じられてきた。例えば、重複形はできごとの反復などと結びつき、語頭の/p/は「張力のある表面」などを表すとされる (Hamano 1998)。これらの特異性が原因となり、従来のオノマトペ研究は、その形式や音象徴の記述が大半を占めてきたといつてよい。

(2) 一方、オノマトペの機能的特徴 (どのように使われるか、どのような効果を持つか) については、「鮮明」「微妙なニュアンスを伝える」「直感に根ざす」といった印象論的な形容にとどまっており、本格的な探究がほとんどなされてこなかった。西アフリカやアマゾンの言語については、わずかながらオノマトペの語用論的分析がなされてはいるものの (Nuckolls 1996; Dingemans 2011)、それらの研究はフィールドワークに基づくものであるため、洞察力に富む反面、データ量に限界を抱える。

2. 研究の目的

(1) オノマトペの機能面を探究するため、本研究では主に日本語のインタビュー動画を用いた量的・質的研究を行うことを目的に据えた。具体的には、オノマトペの発話に伴う話者の行動に着目し、強調形態、イントネーション、声質 (声色)、ジェスチャー、表情、視線の動きなどの特徴を観察することで、コミュニケーション行動の一部としてのオノマトペの特徴に焦点を当てた。

(2) また、これらの特徴がオノマトペそのものの文法的特徴とどのように関連しているのかを見ることで、オノマトペが言語構造に段階的に組み込まれている様を示そうと考えた。これは、言語類型論や言語起源論へとつながる大きな問題である。

(3) インターネット上で公開されているインタビュー動画などの視聴覚データは、言語学をはじめとする学術研究において大きな利用価値を持つと考えられるが、そのことはあまり広く認知されていない。本研究の成果を国内外で広く発表することで、これらのデータベースの有効性を示すことも、本研究の目的であった。

(4) 本研究の成果は、研究代表者が構築を進める日本語学習者向けのオンラインリソースである『マルチメディア日本語オノマトペ事典』に今後反映させる予定である。イントネーションやジェスチャーといった特徴は、オノマトペのダイナミックな側面を際立たせるため、学習にプラスに働くことが期待される。

3. 研究の方法

(1) 主として、NHK がインターネット上で公開する『NHK 東日本大震災アーカイブス』(震災コーパス) と『NHK 戦争証言アーカイブス』(戦争コーパス) という 2 つのインタビュー動画と書き起こしを活用し、オノマトペの使われ方を観察した。震災コーパスは、東日本大震災を経験した被災者、救助者、医師などへの 10 分前後のインタビューであり、その性質上、感情の動きが大きく、オノマトペの特徴も観察しやすい。一方、戦争コーパスは、基本的には戦争経験者のモノログであり、淡々と語られるものが多いが、各インタビューが 1 時間前後と長いので、話題の種類と言語特徴の関係を観察することができる。

(2) 目視と聴き取りにより収集した各オノマトペに対し、話者の行動的特徴についてコーディングを施し、オノマトペと一般語 (オノマトペではない副詞や動詞) を比較した。オノマトペについては文法的な分類を行い、詳細な分析を試みた。さらに、結果を他言語の観察と比較することで、言語類型論的な考察を試みた。このステップにおいては、予てより交流のある海外の様々な言語の研究者とのやりとりが役立った。

(3) テレビインタビューがかしこまった言語使用場面であることを踏まえ、砕けた日常会話の例として『名大会話コーパス』に収録されている 27 の友人間会話も随時研究に取り入れた。

4. 研究成果

(1) まずは、オノマトペに伴う言語的・非言語的特徴のうち、観察が容易な強調形態 (例: 「ニコニコニコッ」のような多重重複や「ニコーッ」のような母音延長) を確認した。その結果、震災コーパス (うち 214 本のインタビュー) では約 50%、戦争コーパス (うち 64 本のインタビュー) では約 30%のオノマトペにこれらの特徴が見られた。震災コーパスのインタビューでは、比較的最近の記憶が (しばしば被災現場で) 語られるため感情の起伏が激しい傾向にあり、オノマトペも強制的に用いられやすかったものと考えられる。このことを踏まえ、以降の研究の

主たる対象は震災コーパスとした。

(2) ① 発話内の特定の要素を際立たせる特有のイントネーション、声質、類像的(=模倣的)なジェスチャーなどの特徴は「表出的特徴」と呼ばれる。震災コーパスを用いた量的な調査の結果、図1のように、表出的特徴はオノマトペにおいて特に頻繁に現れることがわかった(Akita & Dingemanse 2019)。ここでは、一般語の代わりに「準オノマトペ表現」を対象とした。準オノマトペ表現とは、「ずっと」「どンドン」「すっかり」など、オノマトペと同様の形態を持ちながら、意味の抽象性ゆえ様々な述語と共起し、結果、目立って出現頻度が高い表現をいう。例えば、「ムシャムシャ」というオノマトペは、「ムシャムシャと{食べる/×遊ぶ/×書く}」のように「食べる」と強い共起関係を見せる一方、「ずっと」という準オノマトペ副詞は、「ずっと{食べる/遊ぶ/書く}」のように多様な動詞を修飾し、かなりの高頻度で出現する。

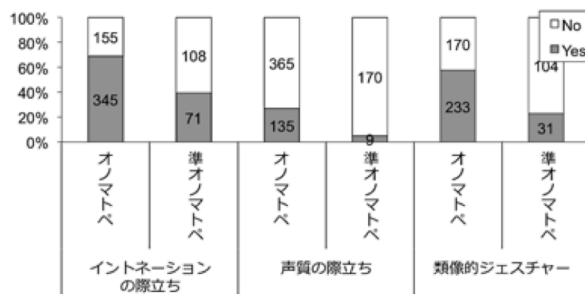


図1. オノマトペと準オノマトペ表現における表出的特徴の生起率

② オノマトペが表出的特徴を伴いやすい理由としては、表出的特徴がオノマトペの模倣力に貢献するという点が挙げられる。例えば、「ムシャムシャ」というオノマトペは、籠ったような低い声でゆっくりと発音することで、特定の咀嚼の様子がより忠実に再現される。さらに「ムシャムシャ」に合わせて顔を上下に揺すれば、その描写力はさらに向上しよう。各表出的特徴がどのような意味を描きうるかについては、別の研究(Akita 2020)でも、移動の様子を表すオノマトペ(例: ブラブラ、テクテク)を例に詳しく検証した。

(3) ① さらに、表出的特徴は、オノマトペが(i-a)のように述語となる場合よりも、(i-b)のように副詞として述語を修飾する場合に多いことがわかった(Dingemanse & Akita 2017)。(i-b)では、オノマトペに母音延長が見られることに加え、両手で渦を描くジェスチャーが同期している(D...はインタビュー番号)。

(i) a. 家の周りをグルグルしてたら... (述語; D0007010150)



b. 船がグルグルと回って... (非述語; D0007010180)



図2は、オノマトペを非述語用法(主に副詞用法)と述語用法に分け、表出的特徴の生起率を集計したものである。いずれもはっきりした差が確認できる。

② オノマトペは、文構造の中核である述語に入り込むことにより、その描写性をいくらか失うようである。図2における述語的オノマトペの表出性の低さは、この解釈を支持する。

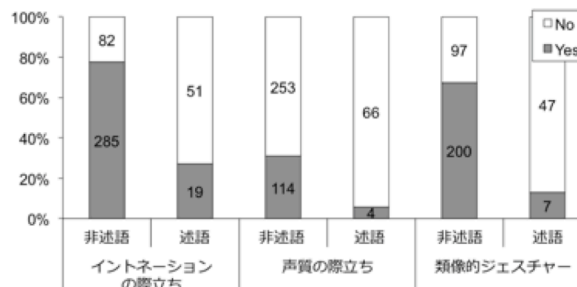


図2. 非述語・述語的オノマトペにおける表出的特徴の生起率

③ オノマトペが文構造に入り込む様子は、予てより提案されている「オノマトペ言語起源説」にも通ずる部分がある。原始的なオノマトペは、多分に模倣的であり、その分、表出的特徴を大いに有し、ジェスチャーとともに発せられていたと憶測される。そのようなオノマトペが慣習化し、次第に模倣性と表出性を失い文構造へと発達していった結果、言語コミュニケーションが創発したのかもしれない。本研究課題の終盤では、このような言語進化論や言語類型論に関わる提案をまとめるに至った(秋田 2021)。

(4) ① 次に、表情や視線といった顔に関わる言語付随行動に焦点を当てた。その結果、オノマトペは準オノマトペ表現または一般語（動詞）よりも、わずかながらこれらの行動を伴いやすいことがわかった (Akita 2019b)。例えば、(ii)では、オノマトペの発話時に、はっきりとした表情の変化が現れている。一方、(iii)では、オノマトペを発すると同時に、聞き手とのアイコンタクトのため顔を上げている。

(ii) 痛くて。キチーッと挟まれて。(D0007010036)



(iii) 上が ドーンと落ちてきたんですね。(D0007010005)



図3は、オノマトペ、準オノマトペ表現、一般動詞における表情の明らかな変化、アイコンタクト、視線のそらしの生起率をまとめたものである。表情の変化とアイコンタクトについては、準オノマトペ表現や一般動詞よりも、オノマトペにおいて有意に頻繁に生じることがわかった。

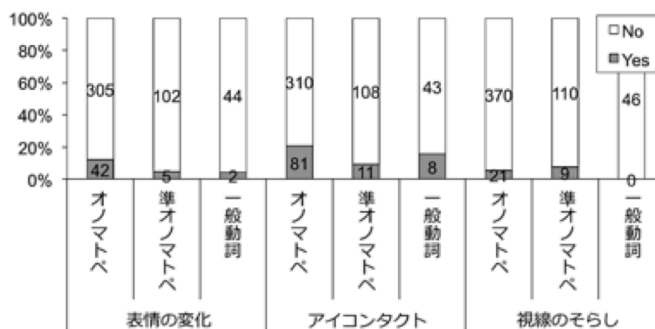


図3. オノマトペ、準オノマトペ表現、一般語における表情・視線行動の生起率

② 表情との共起には、オノマトペの感情表現としての側面が現れていると解釈できる。例えば、「ニコニコ」にはポジティブな感情、(ii)の「キチーッ」にはネガティブな感情が伴う。オノマトペは多面的な意味を持ち、単に五感経験を模写的に表しただけの表現ではないのである。一方、オノマトペ発話にアイコンタクトが同期しやすい理由としては、オノマトペの発話意図に「共感」という要素が含まれていることによると考えられる。オノマトペは、主観的な五感経験を音声でコンパクトに再現しようとする言語表現である。その再現の目的が、聞き手との主観の共有であると考えれば、発話と同時にアイコンタクトにより聞き手に共感を求めるのは、自然な行動といえそうである。オノマトペの語用論ははまだ草創期にある。今後、さらなる追究が必須である。

③ 本研究で明らかになったオノマトペの視聴覚性あるいは意味の多面性は、日本語学習者にも有用な情報であると思われる。本研究課題で得られた成果は、今後『マルチメディア日本語オノマトペ事典』へと反映させていく予定である。その準備段階として、「どのような意味のオノマトペにどのような視聴覚情報が有効か」という点について提案を行った (Akita 2016)。例えば、視覚的な情報を表す「ニコニコ」は、ビデオやアニメーションといった視覚的媒体を用いた学習が有効と考えられる。一方、「サラサラ」と「ザラザラ」が表し分ける触覚の違いを理解するには、触覚を伝える素材 (例：砂や紙やすりの画像) を採用するのが効率的であろう。

(5) ① 本研究期間には、以上の主要研究に加えて、言語表現 (語彙項目) としてのオノマトペの再検討を開始した (秋田 2020; Akita et al. 2020)。具体的には、オノマトペの「音象徴」性を問い直す試みを行った。「サラサラよりザラザラは粗くて不快である」というように、オノマトペの構成音には音象徴的な意味が想定されるのが一般的であり、その音象徴は「自然」な音と意味の結びつきと考えられてきた。しかし、「サラサラ/ザラザラ」のような有声性 (清濁) による意味の対立が、他言語のオノマトペにそれほど見られないことにも窺われるように、オノマトペの音象徴は、多分に言語個別的であり必然性 (ないし自然さ) を欠く。実際、日本語学習歴のない中国語話者や英語話者は、有声性による快不快の音象徴を知覚しがたいことが知られている。オノマトペの音象徴の問い直しは、従来のオノマトペ論の根本を揺さぶるのみならず、オノマトペの言語表現としての「恣意性」に目を向ける必要性を改めて示唆する。

② 本研究期間には、オノマトペに関する入門的な文章や概説論文なども多く発表した (Akita 2015; 秋田 2016; Akita & Tsujimura 2016; 秋田 2017, 2019; Akita 2019a; Akita & Dingemans 2019; 大堀・秋田 2020)。また、オノマトペをテーマとする2冊の国際論文集の編集にも携わった (*The Grammar of Japanese Mimetics* (Iwasaki et al. 2017), *Ideophones, Mimetics and*

Expressives (Akita & Pardeshi 2019))。日本語は、オノマトペが豊富な言語としては例外的にデータ、研究量、研究者に恵まれている。引き続き、日本語のオノマトペ研究を積極的に世界に発信することで、そのメリットを最大限活かしていきたい。

<引用文献（研究代表者によるものを除く）>

- ① Dingemans, Mark. 2011. *The Meaning and Use of Ideophones in Siwu*. Ph.D. dissertation, Max Planck Institute for Psycholinguistics.
- ② Hamano, Shoko. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford: CSLI Publications.
- ③ Nuckolls, Janis B. 1996. *Sounds Like Life: Sound-Symbolic Grammar, Performance, and Cognition in Pastaza Quechua*. Oxford: Oxford University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計38件（うち査読付論文 23件 / うち国際共著 8件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 なし
2. 論文標題 The typology of manner expressions: A preliminary look	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Motion and Space across Languages: Theory and Applications	6. 最初と最後の頁 39-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1075/hcp.59.03aki	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 62
2. 論文標題 The linguistic integration of Japanese ideophones and its typological implications	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Canadian Journal of Linguistics	6. 最初と最後の頁 314-334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1017/cnj.2017.6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mark Dingemanse, Kimi Akita	4. 巻 53
2. 論文標題 An inverse relation between expressiveness and grammatical integration: On the morphosyntactic typology of ideophones, with reference to Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Linguistics	6. 最初と最後の頁 501-532
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1017/S002222671600030X	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 秋田喜美	4. 巻 なし
2. 論文標題 外国語にもオノマトベはあるの？	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 オノマトベの謎：ピカチュウからモフモフまで	6. 最初と最後の頁 65-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita, Takeshi Usuki	4. 巻 52
2. 論文標題 A constructional account of the "optional" quotative marking on Japanese mimetics	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Linguistics	6. 最初と最後の頁 245-275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1017/S0022226715000171	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋田喜美	4. 巻 7
2. 論文標題 言語体系の中のオノマトペ	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 レキシコンフォーラム	6. 最初と最後の頁 19-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 なし
2. 論文標題 Grammatical and functional properties of mimetics in Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Grammar of Japanese Mimetics: Perspectives from Structure, Acquisition and Translation	6. 最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kimi Akita, Natsuko Tsujimura	4. 巻 3
2. 論文標題 Mimetics	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation	6. 最初と最後の頁 133-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/9781614512097-008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 46
2. 論文標題 A multimedia encyclopedia of Japanese mimetics: A frame-semantic approach to L2 sound-symbolic words	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Cognitive-Functional Approaches to the Study of Japanese as a Second Language	6. 最初と最後の頁 139-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/9781614515029-009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 なし
2. 論文標題 Sound symbolism	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Handbook of Pragmatics: 2015 Installment	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1075/hop.19.sou1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 2
2. 論文標題 The "dynamic" nature of stative mimetic verbs in Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Cognitive Linguistics	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠原和子・秋田喜美	4. 巻 なし
2. 論文標題 音象徴・オノマトペと認知言語学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 認知言語学大事典	6. 最初と最後の頁 405-415
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋田喜美	4. 巻 なし
2. 論文標題 オノマトペ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 よくわかる言語学	6. 最初と最後の頁 192-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 なし
2. 論文標題 Mimetics, gaze, and facial expression in a multimodal corpus of Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Ideophones, Mimetics and Expressives	6. 最初と最後の頁 229-247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1075/ill.16.10aki	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita, Mark Dingemans	4. 巻 なし
2. 論文標題 Ideophones (mimetics, expressives)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Oxford Research Encyclopedia of Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/acrefore/9780199384655.013.477	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 なし
2. 論文標題 Ideophones	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Oxford Bibliographies in Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/OB0/9780199772810-0236	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noburo Saji, Kimi Akita, Katerina Kantartzis, Sotaro Kita, Mutsumi Imai	4. 巻 14
2. 論文標題 Cross-linguistically shared and language-specific sound symbolism in novel words elicited by locomotion videos in Japanese and English	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0218707
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1371/journal.pone.0218707	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 大堀壽夫・秋田喜美	4. 巻 なし
2. 論文標題 類像性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 認知言語学II	6. 最初と最後の頁 115-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 17
2. 論文標題 Modality-specificity of iconicity: The case of motion ideophones in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Operationalizing Iconicity	6. 最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1075/ill.17.01aki	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 なし
2. 論文標題 Mimetic 'go'-verbs in Japanese.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 認知言語学の羽ばたき：実証性の高い言語研究を目指して	6. 最初と最後の頁 68-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita	4. 巻 12
2. 論文標題 Japanese ideophones from a typological perspective	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸言語学論叢	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita, Jingyi Zhang, Katsuo Tamaoka	4. 巻 2
2. 論文標題 Systematic side of sound symbolism: The case of suffixed ideophones in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋田喜美・ボニー＝マククリーン	4. 巻 なし
2. 論文標題 音象徴知覚の日英対照：意味地図による検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実験認知言語学の深化	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 秋田喜美	4. 巻 20
2. 論文標題 オノマトベの音象徴性再訪	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋田喜美	4. 巻 なし
2. 論文標題 オノマトベの原始性と言語類型	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語と言語類型論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimi Akita, Yo Matsumoto	4. 巻 なし
2. 論文標題 A fine-grained analysis of manner salience: Experimental evidence from Japanese and English	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Broader Perspectives on Motion Event Descriptions	6. 最初と最後の頁 143-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Arthur Lewis Thompson, Kimi Akita, Youngah Do	4. 巻 -
2. 論文標題 Iconicity ratings across the Japanese lexicon: A comparative study with English	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Linguistics Vanguard	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Kimi Akita, Keiko Murasugi
2. 発表標題 Innovative compounds in Japanese food descriptions and beyond
3. 学会等名 Conference on the Language of Japanese Food (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kimi Akita
2. 発表標題 General commentary on Pokemonastics
3. 学会等名 The 1st Conference on Pokemonastics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kimi Akita
2. 発表標題 Phonosemantic maps: Toward a typology of sound symbolism
3. 学会等名 The 1st Conference on Pokemonastics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋田喜美
2. 発表標題 日本語のオノマトペと言語類型論
3. 学会等名 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第3回合同研究発表会 Prosody & Grammar Festa 3 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimi Akita
2. 発表標題 Limits of auditory iconicity: The semantics of motion ideophones in Japanese
3. 学会等名 The 11th International Symposium on Iconicity in Language and Literature (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kimi Akita
2. 発表標題 Decomposing the lexical iconicity hierarchy for ideophones
3. 学会等名 Types of Iconicity in Language Use, Development and Processing (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 秋田喜美
2. 発表標題 外国語にもオノマトペはあるか？
3. 学会等名 第11回NINJALフォーラム「オノマトペの魅力と不思議」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 秋田喜美
2. 発表標題 オノマトペの共感覚性と多感覚性
3. 学会等名 日本語用論学会メタファー研究会「安芸の陣」シンポジウム「オノマトペ、共感覚とメタファー：3つの認知的現象をめぐって」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kimi Akita
2. 発表標題 The low iconicity of mimetic reduplication in Japanese
3. 学会等名 Workshop on mimetics II: New approaches to old questions (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kimi Akita
2. 発表標題 When ideophones are "childish": Toward a pragmatic typology of ideophones
3. 学会等名 日本語用論学会第18回年次大会シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Kimi Akita, Jingyi Zhang, Katsuo Tamaoka
2. 発表標題 Systematic side of sound symbolism: The case of suffixed mimetics in Japanese
3. 学会等名 関西言語学会第44回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋田喜美
2. 発表標題 オノマトベの音象徴性再訪
3. 学会等名 日本認知言語学会第20回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimi Akita
2. 発表標題 Ideophones and iconicity in Japanese
3. 学会等名 Pre-event lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives, 15th International Cognitive Linguistics Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Kimi Akita, Prashant Pardeshi	4. 発行年 2019年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 325
3. 書名 Ideophones, Mimetics and Expressives	

1. 著者名 Noriko Iwasaki, Peter Sells, Kimi Akita	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 240
3. 書名 The Grammar of Japanese Mimetics: Perspectives from Structure, Acquisition and Translation	

1. 著者名 堀江薫・秋田喜美・北野浩章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 -
3. 書名 類型論	

1. 著者名 當野能之・鈴木幸平・秋田喜美・森下裕三	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 212
3. 書名 認知言語学の羽ばたき：実証性の高い言語研究を目指して	

〔産業財産権〕

[その他]

Kimi Akita
<https://sites.google.com/site/akitambo/Home>
Kimi Akita (researchmap)
<https://researchmap.jp/akitambo>
Kimi Akita on ResearchGate
https://www.researchgate.net/profile/Kimi_Akita
MEJaM / マルチメディア日本語オノマトベ事典
<https://sites.google.com/site/jpmimeticthesaurus/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----